

田植後 1 か月をめやすに中干し開始 ～適期中干しで全量 1 等米～

巻農業普及指導センター

【重点ポイント】

- ① 田植後 1 か月をめやすに生育に合わせて中干し開始
- ② 藻、ワキが多い水田では、水更新・夜間落水を実施し、初期生育を確保
- ③ ケイ酸追肥で稲体強化（6 月末～7 月上旬）
- ④ 中干し終了は、出穂の 1 か月前までに（その後は間断かん水～飽水管理）

田植えからの平均気温が高く推移したため稲の生育は順調です。今後の気象は、気温が高く、日照時間が多い確率が高いと予報されています。ワキや表層剥離も見られますので、田植 1 か月後をめやすに中干を開始しましょう。

1 コシヒカリの中干し開始の目安

移植期	中干し開始時期の目安		
	時 期	株あたり茎数	m ² 茎数
5 月 3 日植え	6 月 1～5 日	(50 株植) ⇒ 16 本	250 本
5 月 10 日植え	6 月 8～13 日	(60 株植) ⇒ 14 本	

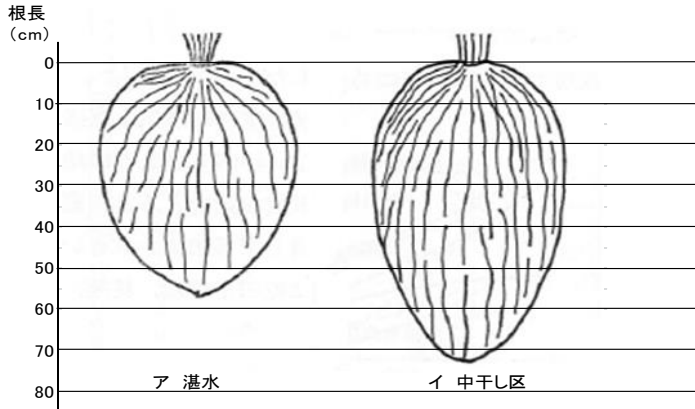
2 管理のポイント

- (1) **中干しは田植後 1 か月をめやすに実施！～中干しの遅れは過剰分けつによる品質低下要因～**
 - ・目標穂数の 70% 程度の茎数を確保したら、直ちに落水して、中干しを開始する。遅い中干しは根の発達が抑制されるので、適期中干しで根量の増大を図る。
 - ・6 月中旬に用水が止まる地域では、田植後 1 か月で一旦中干しに入り、用水が止まる前に一度灌水し、自然落水とする。
 - ・溝切りは、軽く地固め後に 8～10 条毎にできるだけ細かく実施する。溝の深さは 10cm 以上とし、登熟期にも活用できるようにしっかりと切る。
 - ・田面に小ヒビが入り、軽く足跡がつく程度まで中干しを実施する。
 - ・中干しは出穂 1 か月前までに終了する（幼穂形成期にかかると品質が低下）。
- (2) **中干し後は、飽水状態を維持！～適度な土壤水分で根の活力を維持～**
 - ・中干し終了直後は、浅水の間断かん水を行い、徐々に飽水管理へ移行する。
 - ・中干し後は、長期湛水を避け、飽水管理によりうわ根の発根促進や根の健全化及び地耐力の維持を図る。
- (3) **藻類、表層剥離、ワキに注意！～適正な水管理で初期生育を確保～**
 - ・除草剤散布後 7 日間の止水期間を終え次第、ワキや藻類の抑制のため、水の更新や夜間落水を行う。（発生が著しい場合は、3 日程度の落水で対応）
 - ・除草剤散布後 7 日間の止水期間を終え次第、稲の生育に合わせた水管理を実施する。
 - ・葉色が淡くても根張りが回復すると葉色が濃くなるので、追肥は控える。
- (4) **ケイ酸追肥（6 月末～7 月上旬）を行い、稲体を強化**
 - ・ケイ酸追肥は、「茎葉の硬化」「根の活力維持」「高温時の登熟向上」等の効果があるので積極的に施用する。

【参 考 資 料】

表1 中干し～溝切りの方法

実施手順	落水 ← (溝切り) ———— 中干し ———— 走り水・間断かん水
溝切り間隔	2.5m間隔に1本、末端を排水路に接続
溝切り深さ	10cm以上を確保
中干し時期	目標穂数の70%を確保したら直ちに開始、出穂1か月前までに終了
中干し程度	小ヒビが入る程度 (乾かしすぎた大ヒビは厳禁)



〈中干しで根を深く！〉

- 左図は、水管理の違いによる出穂期頃の根の状態のイメージ図
- 中干しなど節水管理は土中に酸素が入るため根が深く伸びる傾向

図1 水管理と根の発達のイメージ (原図 星川清親氏)

表2 中干し時期と品質 (平成11年佐渡農技)

中干し時期	発生率 (%)		
	乳白粒	心白粒	合計
早期 (5/31)	4.0	0.7	4.7
標準 (6/9)	8.4	0.6	8.9
遅期 (6/21)	9.5	2.2	11.7

注) 肉眼観察による判定



図2 適正な中干しの程度 ～小ヒビ状態～
(過度な中干しで大ヒビにしないこと)

〈遅い中干しで品質が低下！〉

- 遅い中干しは、乳心白粒等が多発
- ※中干しが早すぎても、その後の間断かん水の徹底で、良質茎が確保でき、収量は標準並となる。

〈中干しの終了時期が遅すぎると品質低下！〉

- 出穂前1か月以降の中干しは品質低下になりやすい。

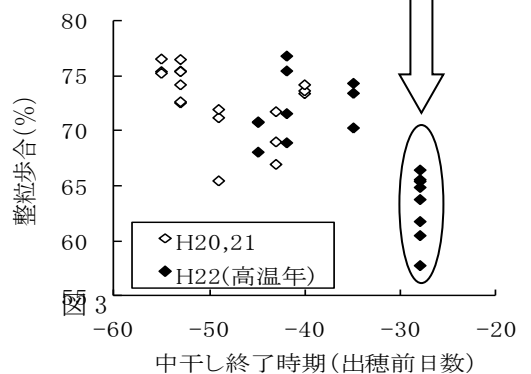


図3 (平成20～22年 作物研究センター)